

ことになっていました。いまだに無計画なところはまったく変わらないうでなければね。マークさんはどういうきっかけで日本に興味をもったのですか。

**ピーターセン** アメリカの大学時代にいわゆる世界文学の授業があって、英訳で日本の小説を読みました。スペイン語の文学などいろいろ読んだのですが、一番印象的だったのは、川端康成の『山の音』。あとは谷崎潤一郎の『細雪』です。これが実にいい英訳だった。もちろん特別に惹かれたということは、描かれていた世界が自分の感覚と性格に合っていたのだと思います。また、担当の先生が非常に魅力的な人で、原文で読むと何倍も面白いはずだということで、じゃあ日本語を勉強してみようということになりました。とは言っても日本語は難しかったです。例えば普通アメリカの大学でフランス文学を専攻している人は、一年くらいで小説が読める程度までできるようになるはずですが、英語とフランス語はそれほど言語的に近いのです。日本語だとちゃんと読めるようになるまで何年かかるかまったく見当がつかなかった。先が見えないまま、独学で日本語の勉強を始めました。二代も半ばを過ぎていたので、将来を考えるとかなり危険な挑戦だったかもしれません。



マーク・ピーターセン 金沢星稜大学人文学部教授。明治大学名誉教授。1946年、アメリカ・ウィスコンシン州生まれ。コロラド大学で英文学、ワシントン大学大学院で近代日本文学を専攻。『英語のこころ』（インターナショナル新書）、『日本人の英語』（岩波新書）など多数の著書がある。

**バラカン** それはアメリカか？

**ピーターセン** そうです。それから大学院で日本文学を専攻したのですが、そこでアメリカ人の先生による文学作品などの和文を英訳する授業を受けました。そして一九七七年、三十一歳で初めて日本で日本人の先生に会話を教わりました。考えてみればずいぶん遅かったですね。ともあれ、もともとは日本の文学を読みたいと思っただけで日本に来るきっかけでした。バラカンさんも日本に来たのは、七〇年代でしたね。

できないから、それがストレスになったんでしょ。うね。ただ、それだからといって日本語を一生懸命勉強しているようでもない。プライドが邪魔をしたんだと思います。

### 日本語との格闘

**バラカン** 語学の習得にプライドは必要ないと思います。失敗しているのを人に聞かされたくない、というプライドをどうやって捨てられるかが肝心。いい意味で子どもにならないとダメでしょう。僕も大学で四年間やっていながら読み書きはある程度できましたけど、日本に来てほとんど話せなかった。会社では日本語で話しましたが、たどたどしいもいところでした。もちろん、フラストレーションはたまりました。**ピーターセン** 学校に通ったりしましたか？**バラカン** いやいや、プライドを捨てたトレーニングだけです。当時住んでいた部屋は吉祥寺の駅から歩いて一五分くらいのところ、会社から帰宅するとき井の頭公園を突っ切っていたんです。途中誰もいないので、いろいろな言いくい日本語を何回も何回も繰り返して口に出していました。もしすれ違った人がいたら、ちょっとおかしい人だと思ったでしょうね。で

も、それくらいやらないと上手にはならない。

**ピーターセン** 私も本や映画、テレビ番組などで覚えた日本語をあえて使っていました。『サザエさん』を見て、初めて聞いた普通の食卓の会話が面白いと思えば、即使ってみるという感じ。とりわけ「顔に書いてある」や「白い目で見ると」「きまりが悪い」などのような比喩的表現を一度知ったら、無理にでもすぐに試してみたくまりました。恥をかかもしれない、という心配はありましたが、それで先方に反応があると「ああ、通じた」とうれしくなる。それがまた一つのモチベーションになりました。

**バラカン** 僕は通じた喜びより恥ずかしかった記憶のほうが圧倒的に多いですね。来日した当初「蓄音機」と言って、「それ、ステレオっていうんだよ」って指摘されました。美容院のことを「髪結い」とかね。大学では会話の授業はほとんどなく、読んでいたテキストの中には、森鷗外の『高瀬舟』『山椒大夫』などがありました。が、どういわけか古くさい言葉はかなり教わっていました。いまだに毎週のようにラジオの生放送で言い間違えたりして恥ずかしい思いをしています。

**ピーターセン** 単語の面もそうですが、日本語の独特の表現が難しい。例えば表現を柔らかく

**バラカン** 七四年です。

**ピーターセン** 日本に来て違和感なく住みやすい国だと感じましたか。

**バラカン** 最初はね、なんでも面白かったです。基本的に順応しやすいタイプなんです。一年くらいは、すごくワクワクした気分なんでも吸収していました。でもだんだん慣れてくると日本の上下関係に疑問を感じてきました。イギリスの人間関係は、アメリカも似ていると思いますが、基本的に平等で、年齢にかかわらずはつきりモノを言える文化があります。日本では、会社で目上の人に対して気を遣わなきゃいけない、ちょっとした意見を言っただけでも内容ではなく自分の立場が問題になったりするので、そのへんが面倒くさくなって、フラストレーションがたまることもありました。**ピーターセン** 私の場合、よく言えば順応性でしようけど、これといった自分というものを強くもってはいなくて、他人に合わせてもいいかな、という性格なので、それほど違和感なくスムーズに溶け込めました。日本の大学に勤め始めたとき、何人かの同僚の外国人の先生たちが、毎週末に集まって日本の悪口ばかり言うのに遭遇しました。みんなインテリのつもりなのに、日本語で自分のインテリジェンスをうまく表現

するために「お」をつける場合です。以前、日本に住んでいるイギリス人の友達が、「お花」とか「おうどん」とか、何にでも「お」をつけていたので日本人に注意されたいです。その人は、それで「相撲さん」って言ったら、「それはつけたほうがいい」って言われて、日本語は難しいってこぼしていました。ルールがあるようでなく、多分に感覚的な問題です。また、世代によってどういう言葉に「お」をつけるか調べたら、ずいぶん差があるでしょう。でも、からかい半分で使われることのある「おビール」や「おフランス」などは面白いと思います。

**バラカン** 僕の印象では、女性は多くつけているように感じます。それで思い出したんですが、まだ日本に来て二カ月くらいのとことです。僕が働いていたシンコーミュージックで『ミュージック・ライフ』という当時日本で一番人気のあった音楽月刊誌を発行していました。編集部員はほとんど僕と大体同じくらいの年齢の女性でしたが、その人たちとちょっと音楽談議をしていました。ある日、課長と仕事の話をしていたら急に「お前はずいぶんめめしい男だな」って言われました。「めめしい」という単語がわからないので辞書で調べたら、「女々しい」って書いてある。彼女たちと日常的に接し